KOSUGI+ANDOの新作

小林昌廣

大阪のギャラリーCASでKOSUGI+ANDOの新作展である「遷移状態」を見た。
空間では二つの画面が四方の壁面に写し出されている。それらは空間上に定位された二台のプロジェクターによって投射されているのだが、一定の速度とタイミングで画像が変化し、また写し出される場所も変化する。それにナレーションが重なる。最初は気象情報かと思ったら、さにあらず「放射能情報」という極めて現代的かつ現実的な情報がランダムに流されているのである。空間の端には一台のベビーベッドがある。そして枠組みだけの白い椅子が一脚。　見えない赤ん坊を見えない母親があやしているようでもある。あやしている?　そう、確かにあやしているのだ。ベッドの上には天井からベッドメリーぶら下がっていて、それはこれといった規則性を持たずに回っているかに見える。そしてメリーからぶら下がったモビールは日本地図でよく目にしている各都道府県の何ヶ所かが分割され、鈍い金色の板となって連なっている。それらはまるで炎に炙られて苦しげに旋回しているかのようである。椅子もベッドも、今年の5月に神戸の夢創館で行なわれた展覧会「Second Burial 二番目の埋葬」でも使用されたものであり、さらに遡れば1995年8月に福井で発表された「INNOCENT BABIES」においても登場していた。なぜそれらの展覧会に共通してベビーベッドが配置されているか。　それはこれらの展覧会に共通したテーマが「原発」ないし「放射能」であったからだ。いや、それは正確ではない。　アーティストは何らかの社会的な事件をアート的に表象するのではなく、およそ非アート的なモチーフをアートという対峙困難な手法によって「告発」ないし「警告」することのほうが重要であると思われる。だからといってKOSUGI+ANDOはそうした社会的な作品としてこれらを提示しているとは思えない。二枚のスライドが映しだす画像はどれも「福島の原発事故」を想起させるにはほど遠いものであり、およそ長閑な田園風景であり、いたって平和な地方都市の情景である。アナウンスの音声とて、きわめて事務的な発声であり、それなりの「数値」がヒステリックに叫ばれているわけではないので、「今回の事故」というものを知らなかったら、この作品は「回転する二つの映像とベビーベッド」という、まるで「解剖台の上のミシンとコウモリ傘との出会い」的な意味合い以上のものを持たないことになる。

だが、長閑な風景や静寂な空間は突如として遮られる。スライドプロジェクターがけたたましい音を立てて回転を早めるからだ。プロジェクターを乗せた回転台が激しく回転する音、それにめまぐるしくスライドを変えるためにドラムからスライドが出し入れされる音、それらが展示空間に鋭い亀裂を走らせる。　見ている者の不安度は昂まり、心拍数は上がり、高速で回転し明滅する福島の「長閑な風景」を落ち着いて見る視線は失われて、空間内で動かずに音も立てていない場所を探さざるを得なくなる。そこがベビーベッドと座る板のない椅子である。　それらが音も立てず動きもせずに屹立しているがために、不在の存在というものに思いをめぐらさないわけにはいかないのだ。

「二番目の埋葬」では、ベビーベッドは土の上に置かれていた。「これは福島の土ですか?」というぼくの問いかけに「そういうことはしません」と安藤さんはきっぱりと云った。そう、そのとおりなのだ。アーティストは福島の光景を描き出したのではないのだ。どこでもない、だが確実に存在するどこかを具体的な景色として外部化しているのに他ならないのだ。「二番目の埋葬」では壁の一面に骨組みだけの椅子のミニュチュアがおびただしい数並べられていて、それがKOSUGI+ANDOの専用装置と云ってもいいであろう上下動するカメラによって撮影され、その画像が正面のスクリーンに映しだされていた。座る場所をもたない椅子、そしてそこに座るべきであった人びとの不在。その不在のありさまが静かに写しだされる。その光景は、まるで祈る者のいなくなった教会の礼拝堂のように、ごく衛生的な空間に見える。「二番

目の埋葬」は、「原発」をインスパイアさせるいくつかの情報＝オブジェェが比較的小さな展示空間に、文字通り埋葬された、巨大なボックスアート的作品であった。こう云ってよければ箱庭的作品と呼んでもいいだろう。放射性物質をそうやって包埋して固定することができれば、そして同時に放射性物質から喚起されるイメージが人びとによって発生し、またそのイメージによって被ったさまざまな悲喜劇や忌まわしい記憶を、こんなふうに埋葬してしまうことができたら...。「二番目の埋葬」は、もしかしたら、「最初の埋葬」よりも前にやってくる「埋葬への希求」といった思考＝志向が隠されているのではないかと、穿った考えまで思い至る。だが、「遷移状態」はもっと挑発的である。写しだされる風景は「原発」をイメージさせない。 放射能は写真におさめることはできないからだ。 だが、それはいつ人や家畜や農作物に対して猛威をふるってくるかはわからない。数百万年クラスの半減期をもつ物質ばかりだ。人間のスケール、人間の歴史を超えている。

ところで、展覧会名の「遷移状態」とは、とくに反応速度論という化学ジャンルにおける重要な概念であり、原系が生成系に変化するときに経過する、もっともエネルギー状態の高い段階をさしている。 これはエネルギー状態をさしているので、構造体として視覚化させることはできない。 つまり、そのときの変化のありさまを「見る」ことはできないのだ。 まるで「嵐の前の静けさ」のような状態だ。 つまりは、この展示空間で写しだされている福島の長閑な風景こそが「遷移状態」であるということなのだろうか。一見穏やかな風景であっても、そこには恐ろしいエネルギーが充満しさらなる分子運動をする機会を狙っているということなのかもしれない。 ちなみに生化学分野での「遷移状態」は、タンパク質化学においてしばしば用いられる概念であり、遷移状態を上手に利用することで酵素を人工的に作ったりすることもできるし、また体内のエネルギー状態が活性化されることによって抗体というタンパク質が合成されることもよく知られている。 つまり、遷移状態はあくまでもエネルギーレベルの問題なので、そこには正負とか善悪といった価値概念は付与されていない。

KOSUGI+ANDOの作品も、たしかに不安や危惧をいささか惹起させないわけでもないが、けたたまくしく回転し不快な音を立てるスライドプロジェクターが予見する(誰もが想像し、そして誰もが想像したくないところの)「破滅」といった方向だけが人間の進むべき道だと思うのは早計であろう。 繰り返すが、遷移状態は抗体を合成する力を秘めているからだ。 歴史の誤謬に対する抗体、科学技術の盲信に対する抗体、そして人間の奢りに対する抗体がいつかできる日を、この装置は夢見ているのであり、ベビーベッドの赤ん坊もその横に座る母親も、その時には鮮やかな温かい姿を見せることになるのだろう。あるいはそうした夢を見ることもこの作品は禁じようとしているのか。 いくつもの不安と問いの間隙に立たされた観客は、明滅する福島の何気ない風景が錯乱する場に何度も立ち会うことになるのだ。

2011/10/18